

# 一心寺かわら版

第五号 平成十七年九月発行

## 「世の安穩」

今年には戦後六十年にあたり、各地で記念式典が行われています。浄土真宗各派の連合である真宗教団連合では、広島で戦争と平和を考える研修会が催されました。平和記念公園や資料館を巡り、被爆された方からさまざまなお話を聞かせていただきました。



私は今回初めて原爆が投下された地を訪れました。本やテレビで少しなりとも知っていたものの、直に資料館を見てまわり被爆者のお話を聞くと、想像を絶するものがありました。現実には及びもつかない悲惨なものであったでしょう。私は今まで傍観者であったことを痛感しました。日々のお参りの中で戦争体験を聞かせていただいたことがありましたが、その事実に驚嘆するだけで、私の問題として受け取っていなかったのでしょうか。



今回広島で聞いた被爆者のお話で心に残ったものが二つあります。一つは平和公園を歩いている時でした。「今、平和を願うシンボルとしてきれいに整備されているこの公園には約二十四万もの戦死者の名が刻まれています。しかし遺骨が発見され埋葬されているのは一部であって、多くは掘り出されることもなくこの公園などの土の下に眠っています。今私たちの足の下に眠っています。」というものです。先人のお骨を踏んでいると聞かされ、申し訳なさに胸が痛みました。それはいつでもどこに居ても同じではないだろうか、以前から聞かされていた、先人のいのちの上に私のいのちがあるということが思い起こされました。

もう一つは、この地域の方々が原爆投下の日や終戦記念日をどう過ごしているかということです。広島は安芸門徒といわれ浄土真宗の盛んな土地であり、被爆者の多くも真宗門徒でした。彼らは公共の記念式典に出席することよりも、わが家の仏壇に手を合わせることを最も大切にしているのだといいます。その合掌念佛の中で、日本国と私たちのために亡くなられた尊い方として感謝の念を捧げるといっただけではなく、なぜ戦争が起こってしまった

のか、戦争を止められなかったことを深く悲しみ、慚愧しているといえます。自らの家族はもちろん戦没者に対する「ごめんなさい」の気持ちが止まらないのでしょうか。

仏教には殺生戒があります。他を殺めること、また殺めさせることを堅く禁じています。それに反したこと、そうせざるをえなかったこと、彼らを死に向かわせてしまったことへの慚愧でしょう。

先日あるカトリックの神学者が世界の宗教の類似性を研究し、その普遍的真理として「地球倫理」を提唱しました。各宗教に共通する、人間が最低限守るべき「殺すな、盗むな、うそをつくな、性的不道徳を犯すな」の四つの教えに基づくものです。この四つは仏教でいう五戒の内の四つに相当します。

また四国学院大学の平和学教授ムワンギ氏はアフリカに伝わる言い伝え、「ウムントウ・グムントウ・ガバニネ・バントウ」（人は他の人によって人になる）を教えてくださいました。これは仏教の縁起の教えにつながっています。世界中のいのちは私と関係のないものではなく、すべてつながっている尊いものちなのです。世界のいたるところで起こっている争いも私の問題として考えられなければならないのでしょうか。

戦後六十年を迎えた今年、平和についてさまざまな議論が起こっているようです。どのようにすれば平和が実現できるかという方法論はそれぞれ異なっていますが、一人一人が平和を願うとい

うことを抜きにしては成り立たないでしょう。

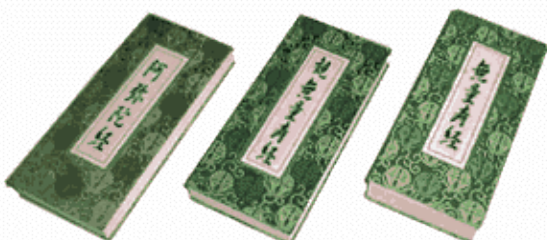
親鸞聖人は、「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」『歎異抄』（縁があれば、それにしたがってどのような行いもしてしまう）という自身の恐ろしさに気付かれました。その上で、「わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏のご恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏ここにいられて申して、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。」「御消息」（浄土往生というわが身の一大事を解決した人は、仏のご恩に報いるべくお念仏して世の中が安らかであってほしい、それが成就していくために仏法が広く伝わってほしいと念ずべきである）と、恐ろしいこともしてしまう私がお念仏との出遇いによって、世の中が安らかであることを願わずにおれない存在になるのだという親鸞聖人の表白でしょう。

浄土往生と同じく自身の問題として「世の安穩」を考え、仏法を聴聞していききたいものです。

### お経ってなあに？②浄土三部経

真宗には浄土三部経といって三つの根本経典があります。長いお経を簡潔にまとめるのは難しく誤解が生じるかもしれません。短く説明します。

『仏説無量寿経』（ぶつせつむりょうじゆきよう）  
お釈迦さまが王舎城（おうしゃじよう）の耆闍



崛山（ぎじやくっせん）において、阿難（あなん）をはじめとする弟子たちに対して、阿弥陀仏の救いを説かれた経です。

まず法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）が悩み苦しむものを救うために願いをおこし、長きにわたり修行し四十八願を成就して、極楽浄土を建立し無量寿仏（阿弥陀仏）となられたことが説かれています。特に四十八願のうち第十八願は、生きとし生けるものすべてに名号（みようごう）「南無阿弥陀仏」を与えて救うと誓うものであり、本願念仏といわれます。この本願が成就しているから、私たちは「南無阿弥陀仏」を聞き信じるときに往生が定まるとい、その阿弥陀仏の徳と浄土のすばらしさ、浄土に往生した人々の徳が説かれています。

そして聖道（自らの力できとりに向かう）が減しても阿弥陀仏による他力の救いは滅することはないのであって、浄土往生を願うべきであると勧められています。

### 『仏説観無量寿経』（ぶっせつかんむりようじゆきよう）

王舎城において、悪友の提婆達多（だいばだつた）にそそのかされた阿闍世（あじゃせ）太子が、父である頻婆娑羅（びんばしやら）王を幽閉し、その王のために食物を運んだ母である韋提希（いだいけ）夫人も捕らえるという悲劇が説かれます。その苦しみの中で韋提希夫人はお釈迦さまに救いを求め、苦しみのない世界である阿弥陀仏の浄土へ往生するための方法を説いてくれるように請いました。

それに応えてお釈迦さまはまず、心をこらして浄土・仏・菩薩

たちを観想する十三の方法を説かれます。次に乱れた心のままで往生する人々のさまを観る三つの方法、またさまざまな善行とそれを行うことができない悪人のための念仏が説かれています。

しかし、最後には阿難に念仏一行を与えられているので、さまざまな行が説かれている中で他力念仏の一行を勧められた経であるとされます。つまり、私たち人間（凡夫）のありのままの姿をあらわして、いかなる人も阿弥陀仏によって救われていくことを説き、念仏による往生を勧められています。

### 『仏説阿弥陀経』（ぶっせつあみだきよう）

お釈迦さまが舎衛国（しゃえこく）の祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）において、舍利弗（しゃりほつ）をはじめとした弟子たちに対して、問いを待たずに自ら説かれた経です。

まず阿弥陀仏の極楽浄土のうるわしい相と、仏・菩薩たちの尊い徳が示されています。次にこの浄土には自らが行う善行では往生できないのであって、一心に念仏することによってのみ往生することができると説かれています。

また終わりに、東・南・西・北・下・上の六方の諸仏が、この念仏往生の法が真実であることを証明されていることが説かれています。

妙好人といわれる念仏者である庄松さんは「お経には庄松をたすけるぞよと書いてある」とおっしゃっています。私たちもお経に説かれる教えを味あわせていただきたいものです。